

■ 編集だより

編集後記

薬好きの精神科医

精神薬理学を専攻していながらこんなことを書くのはおこがましいのであるが、本当に精神科医は薬好きなのだなーと感ずることが多い。かけだしの精神科医であったころ、ある先輩から「アルコール中毒の治療は大変ですよ。だから、それをのめばアルコールを飲みたくならないような薬を開発すればいいですよ。」といわれたことがある。まあ、そんな薬があれば、今度はその薬に依存することになるであろうし、あまりに楽観的といえればそれまでである。もちろん先輩はそのようなことは先刻ご存じで発言されたのであるが、もうひとつ、ある歴史ある精神科病院に当直に行った夜、高齢の院長が半分酔っぱらいながら「外科医の武器がメスならば、精神科医の武器は薬ですよ」とおっしゃったことがある。どちらも切れ味がよいから気をつけるという意味なのか、精神療法などというのはあてにならないから薬の知識をまず身につけるという意味なのか、今になってはわからない。思えば、精神科の医局で先輩が治療の蘊蓄を語っていたのは、ほとんど薬物療法であった。「そういう症例にはね……、こういう薬をちょっと加えればいいんだよ」などと聞いて、さっそく試してみたものである。

昨年は精神科の専門医試験で面接官というのを2回担当した。面接官3人のうちでは一番若かったので、もっぱら司会役を担当して補足的な質問をするのにとどめたが、2回とも他の先生の口火を切る質問が、ほとんど薬の使い方についてのことなので驚いた。そういわれると、薬を上手に使うのが専門医の条件とも書いてある。また、初対面の同業者に対して、最初に聞きやすい質問ということもあろう。1月には今度は面接される側になった。ここでも案の定、はじめの質問は薬の使い方であった。

たくさん出版されている精神科医向けの雑誌でも、症例報告は薬物療法についてのものが多い。薬を直接扱っていない症例報告でも、薬物療法で奮闘している姿がその記載からかいま見える。もっとも工夫しやすいのが薬物療法であるのは間違いない。毎日多数の患者さんが押し寄せる外来の治療で、精神療法をしているなどとは恥ずかしくていえないとすると、薬をとりかえひっかえして、そのうちによくなることを期待してしまう。まさに治療的楽観主義である。しかし本当にこれでいいのか。

最近では患者さんのほうも薬に詳しい。「うつ病の薬は脳の成長を促す物質を増やすんですってね」と聞かれて、びっくりしたことがある。抗うつ薬の作用として新聞に載っていたのだそうである。「このSSRIでは効果が今ひとつなので、SNRIに変えてくれませんか」と、ごくまじめなうつ病の患者さんからいわれたこともある。

今の精神科治療体制の中で、薬をあやつる以外に精神科医のすることがあるのだろうか。精神療法とか認知療法とか大上段に構えなくても、個人の生活や考え方の中から、何らかの問題点を探し出して提示することくらいは、やらなくてはならないのではないかとはいえ、こんなことを考えていると、もう待合室が混み始めている。「次の人がいらいらしておられますよ」と受付の看護師さんが教えてくれる。まずい、まずい。「じゃあ、お話はこれくらいにして、いつものお薬を出しておきますから……」

仙波純一